

連載

【試論】民族総福音化への道 (5)
先ず早天祈祷から⑤副総裁兼事務局長 手束 正昭
(高砂教会牧師)

「韓国教会繁栄の理由」という書物がある。著者は中條儀助という方であり、現在バプテスト連盟津田昭キリスト教会の牧師をしておられる。その中で、中條師は韓国教会復興の最大の理由は祈り、特に「早天祈祷」にあることを指摘しておられる。中條師によると、韓国では、早天祈祷を行わない教会はキリスト教会とは認められない程だという。それでは何故、韓国の教会は早天祈祷をそれ程迄に重視するのだろうか。その理由を次のように書いておられる。「なぜ！早天祈祷を行うのか？韓国のキリスト者は、ただ「キリストに忠実」すなわち「キリストに見習う」ことに生命と存在をかけている。どんな困難、苦勞、痛み、損害があったとしても、キリストを第一として生きる姿勢を全面に押し出して生活している。たとえ集合中に疲れて眠ることがあっても、早天祈祷会に出席する。とくに痛感するのは、若い婦人が赤ちゃんを背中（韓国では腰に負う）におんぶしてさえ出席することである。日本では考えられない光景である」。

二年程も前になるだろうか。私はアメリカに行った折、在米日本人の教会に出席する機会があった。概して元気の無い日本の教会と比べ、「キリスト教国アメリカ」の日本人教会はきつと活気を帯びているに違いないという期待があった。ところが、礼拝開始時刻の十分程前に礼拝堂に入ってしまったが、誰も居ない。只、二人の若い男の子がギターの音合わせをしていた。定刻を少し過ぎてから司会の中年の女性が立ち、讚美が始まったが、ワーシップソングが歌われていたにも拘わらず、一向に盛り上がらない。讚美の最中に三々五々人々が集まり、ざっと一杯になり、讚美がひと区切りすると、今度はその週の誕生日の人達が前に出されて、ブレゼントの贈呈がなされた。それが終わると、今度は新婚旅行から帰って来たばかりの若い夫婦が前に出され、新婚生活や新婚旅行の感想などがダラダラと述べられていった。その後、献金がなされ、最後の方で説教があった。それは神を礼拝すると言うよりも、仲良しクラブの集まりという感じであり、最後に説教がなされたのも、神学的理由というより、遅れて来る人が多く、礼拝の後半部にならないと人数が少ないからという便宜的理由からなのである。

私は酷くがっかりしたのだったが、同時に忽然として日本の教会が何故奮わないのか、どうしてリバイバルしないのか、その本当の理由を悟ったのである。それは端的に、神を第一にしないからである。別言すれば、神を畏れないからである。日本人の中には、「日本教」（山本七平）と言われる「和の精神」に根ざした独特のヒューマニズムが深く巣喰っている。勿論、これには良い面もある。日本人の「他者への思いやりや気配り精神」に連なっていく。「奇跡の復興」と言われる戦後の繁栄をもたらしたのも、その根底には目的に向かつての「まとまりのよさ」があり、これもまた「日本教」に負うところ

が大きい。だが、これが信仰ということになるとマイナスマ面に働いてくる。神との関係よりも、人間との関係を重視するからである。しかし、神よりも人間を第一にしていたのでは、神御自身は働きようがない。従って、リバイバルは起きてこないのである。かくて、パウロは初代教会にあっても、いつの間にか神との関係を第一にするよりも、人との関係を重視する人達に向かって、次のように厳しく勧告した。

「今わたしは、人に喜ばれようとしているのか、それとも、神に喜ばれようとしているのか。あるいは、人の欲心を買おうと努めているのか。もし、今もなお人の欲心を買おうとしているとすれば、わたしはキリストの僕ではあるまい」（ガラテヤ一・一〇）。

韓国のキリスト教が復興し、韓国の教会が成長し繁栄している秘訣は、実に人ではなく神を第一にする信仰姿勢にあったのである。そしてその最も端的な表現こそが、早天祈祷の励行であった。毎日一日の最初の時間を主に捧げ、主との交わりに費やす。これは、聖日礼拝の厳守以上に、什一献金の遵守以上に、神を畏れ、神を第一にしている信仰姿勢に他ならない。それ故に、主なる神はその栄光の御業をなさざるを得ない。正にこのことの故にリバイバルは興ってきたのである。日本の教会も神を畏れることの第一の表現としての早天祈祷が励行されていく時、民族総福音化は大きく進んでいくことになることは疑い得ない。